

## 『調査の現場から 農・漁・林・食・協同組合』の開設について

言わずもがなのことであるが、当総研の研究者は「調査」や「データ分析」を仕事としている。そのアウトプットは論文・論評であったり、個別事例報告であったりする。調査のヒアリングメモや統計データを読み込んで、論稿のような作品に仕上げることはそれなりに力仕事である。論稿としての体裁を整えるためには、そこに一貫したロジックが求められる。それは因果関係であったり、現象面の奥に見出される本質であったり、ある種の“モデル”の抽出であったりする。

ところで、いろいろな事象を整理してロジックを抽出する過程では、難しい言葉だが、“捨象”という思考作業が行われる。これは、根本的なロジックを見出すために、不要な事象を切り捨てる行為である。分かりやすく言えば、人間の骨格を調べるために肉や神経を切り離すようなものだ。

混沌とした現象のなかからロジックという“ある種の秩序”を見出すことは調査・研究という仕事の楽しみのひとつである。もし、そのロジックが現実の問題を解決するうえで役に立つ法則であれば、喜びもひとしおである。

しかし、論稿なるものは一般的には文章が硬く、読むのにも忍耐が要る。筆者には、ワンポイントでよいから、もっと柔らかく、軽やかに、情報発信をすることができないものか、という想いがあった。また、捨象したもののなかにもJA役職員等の読者に参考になることが少なからずあり、それを紹介できないことも残念だった。

この『調査の現場から』コーナーは、必ずしも論理的ではないかもしれないが、これまで紹介できなかった事柄、ワンポイントの分析、調査のなかで発見したこと、現場で活躍されておられる人の話、その土地の風の薫り、味わいなどをいわば“ブログ風”に伝えたいと願って創設したものである。論稿では伝わらない研究員の肉声も少し聞こえたら、それはそれでよいと考えている。

それにしても、最初から硬い文章になってしまい、先が思いやられるが、ともかく、まずは一步を印すことを由として、このささやかな、新しい試みを始めることとしよう。

今回は、本コーナー開設の趣旨説明だけで終わるつもりであったが、ひとつだけ最近の出来事を紹介しておきたい。先日、秋田県のあるJAからの依頼で、JAが所在する市の市長以下市議会議員さんたちの前でお話をさせていただく機会を得た。市の指定金融機関であるJAが、市政側に対するサービスのひとつとして企画された講演である。

ところで、一般的に地方自治体の指定金融機関については、人手や事務コストがかかる割には見返りが少なく、最近では、コスト見合い分の手数料を金融機関側から行政側に要求するケースもみられる。つまり、収益的には割の合わない業務ととらえられている。指

定金融機関業務についてはそのような一般的な理解しか持たずに現地に出かけたが、現地で感じたことは、指定金融機関の獲得に寄せるＪＡ役職員の方々の並々ならぬ熱意であった。地域の雄ともいえる地方銀行と競って指定金融機関の地位を得ることがＪＡ役職員・組合員にとって誇りであり、仕事に取り組む上での力の源にもなっているように感じられた。指定金融機関にかかる“人件費・事務コスト”と役職員・組合員の“誇り・パワー”を秤にかけて比べることはできない。帰路、列車の窓から雪の残る東北の杉林を眺めながら、わたしはＪＡにとっての指定金融機関の意味を考えていた。

（取締役調査第一部長 鈴木利徳）